

主催：上智大学フランス語学科同窓会  
日時：2003年7月5日(土) 午後2時30分～4時  
会場：上智大学 L-921

## アンコール・ワットと上智大学 —カンボジアにおける上智大学の文化貢献—

# 人間が夢を託したアンコール・ワット

石澤良昭（上智大学）

### I部：Eリーチ著『人間を問う作家たち』からはじまる

#### 1. 人間が夢を託したアンコール・ワット

最初に、故P.リーチ先生に感謝を捧げたい。今から43年前に私をアンコール・ワットへ連れて行って下さったり、出会いの場を創ってくださった先生である。

先生の著作の中に、『人間を問う作家たち』がある。私はこの座右の書の中に「人間とは何か」の問いを見つけ、師の高教を實踐すべく、「アンコール・ワット」に問い掛けているところである。

アンコール・ワットは巨大な石積みの伽藍である。天空に聳え立つその尖塔、急斜面の大階段、大回廊、本殿まで続く540メートルの長い参道に対しても、ある種の恐怖に似た衝撃と感動を覚える。

アンコール文明が終わり、数多くの寺院がその役目を終え、ただの石ころとなる時、石は新たな思想を呼び起こし、哲学を生む。それはまるで滅び去った寺院からその魂が抜け出し、また別の魂が吹き込まれていくようである。

アンコール遺跡には、往時の人たちの生活の知恵と、それが造られた時代の最先端の科学技術が盛り込まれていた。それら都城や王宮、祠堂群を建造するためには巨大なエネルギーが必要であった。人々の勤労奉仕が前提であった。それは信仰の証でもあった。宗教を要に社会が健全に機能し、政治、経済が稼動していた。その背景には王と村人のひたむきな神々への篤信と、人々の深い信仰と、来世への救済を願い、それを実現するために寺院を造営し、具現しようとする情熱があったからに他ならない。当時の王や村人たちがアンコール・ワットの石積みを続け、65メートルの尖塔を完成させた篤信のエネルギーは、一体何だったか。神、信仰、来世の救済、自然に対する脅威、死に対する恐れもあっただろう。

アンコールの地に祈りを込めて建立された寺院と祠堂、それらに思いを馳せる時、往時の人たちはどこから来てどこへ行くのかを知っていたのであろうか。アンコール遺跡という過去を究明することは、とりもなおさず私たちの未来を探ることになる。

例えばパイヨン寺院の四面仏尊顔を見る時、信仰に対する喜び、愛することのいとおしさ、日常の労働の苦しさ、死における哀しみなど、人間の様々な感情が塗り込められている。私たちの周りの環境が変わり、どんなに科学が進歩しても、人間のこの感情は少しも変わっていないと思う。

アンコール・ワットやアンコール・トム都城を訪ねる人たちは、その石積みの精巧さに心を奪われ、カミソリの刃も入らないほどきっちりと組み合わせられた石と石を見て、現代の常識では計り知れないほどの技術やその情熱に魂さえも押し潰されてしまう。石造の遺跡の周辺には村人たちが高床家宅を建て、今も生活を続けている。少しも変わらない石積みの遺跡の傍で、新しい生命が生まれ、また死んでいく。何代も何代も繰り返されてきた。

村人はこの遺跡のことを「石の家」と呼称する。儚い人間生活と、永遠なる時間の重さを感じさせる石造祠堂、この割り切れなさが私たち現代人の心を捉えている。

アンコール遺跡は、遺跡自体の中に往時の人たちの願いや祈りが塗り込められている。パイヨンの四面仏尊顔には慶び、哀しみ、怒り、怨念など、今の私たちと同じように人間の様々な感情が映されている。アンコール・ワットの尖塔、パンテアイ・スレイの美しい女神と切妻壁のヒンドゥー教神話のレリーフ、枚挙にいとまがないほど往時の人々のメッセージが届けられている。これらの大寺院や祠堂を通じて、「人間とは何か」、「人間はどこへ行くのか」を深く考えさせる。

## 2. 堂守の「プロームおじいさん」

アンコール遺跡の中には「タ・プローム」とか「タ・ケオ」と呼称される遺跡がたくさんある。これらの呼び名は、カンボジア語で「プロームおじいさん」、「ケオおじいちゃん」を意味する。

いつの頃からか分からないが、近くの村のプロームおじいさんが遺跡に堂守りとして住みつき、下生えを払い、落葉を掃き清め、毎日、献花献香を行っていた。村人たちはいつしか「ケオおじいさんのお寺」と呼ぶようになり、いつの間にか遺跡の俗称となってしまった。今でもタ・プローム寺院では黒い上着を身に着けて、腰の曲がった古老が草ぼうきで掃除を行っている。この頃は孫も手伝っているようである。アンコール遺跡は800年も1000年も前のヒンドゥー教の寺院であり、大乘仏教の寺院であって、同じ仏教でも現在の上座仏教（小乗仏教の一派）とは直接的につながらない。そんな歴史的背景も知らず、老人は毎日、燈明を灯し、合掌しながら一日中功德を積んでいる。

老人の黙々とした精進ぶりを見ると、通俗的な目的のために行なわれていないことは十分に察せられる。そんなひたむきな老人に寺院の由来を知っているかどうか問いただす勇氣など私は持ち合わせていない。彼の前に立つと何か無言のうちに圧倒されそうな雰囲気なのである。もしかしたら寺院の崩れた石材の小山や、そこに刻み込まれた神々の彫像や女神の浮彫りに、時空を越えて訴えてくるテレパシーのようなものがあるのかもしれない。文化財の専門家はこうした遺跡を「リビング・モニュメント」（息づいている遺跡）と呼ぶ。

アンコール遺跡のそれぞれの寺院には本堂があり、ここで日常の祭礼や特別の儀式が執り行

なわれる。修行僧のために高床式の非常に単純な木造の僧坊がある。そこは美しい木立で囲まれ、蓮池があり、全く静寂で、読経の時刻を告げる木板を打つ音が聞こえるだけである。こうした広い境内を持った寺院は、村人にとって静寂黙想の場であり、悟道の入口である。村のお年寄りには本堂にやってきて一日過ごしている。弁当を持参して掃除を手伝っている。草花を飾ったり、灯明を掲げたり、おしゃべりに花を咲かせ、心身ともに安らいだ悠久の時間を過ごしている。そうした光景を見て、人間の幸せとはいったい何かを考えさせられるのは私だけではないだろう。

「一滴一滴も溜めれば筒一杯になる」ということわざがカンボジアにあるが、それは涅槃という境地への道のりを暗示している。

鬱蒼と茂るジャングル、雨季と乾季、高温多湿の気候の中で、村人にとっては自然との結びつきそのものが生活であったし、そうした大自然に対する畏怖の気持ちから、諸精霊を大切にすることによって平穏無事な生活が営まれると考えてきた。密林にはいろいろな精霊が住み、それが吉凶禍福に關与すると考えられている。

熱帯ジャングルに眠るアンコール遺跡は、今、崩壊の危機にある。石の遺跡の上で枯葉が腐葉土となり、そこに植物の種が植え付けられる。やがて成長した樹木は、石の中に根を張り、石を砕き、石の上に無数の葉を散らし、再び腐葉土を生産する。その繰り返しの結果として、石の寺院は少しずつ蝕まれていく。一枚一枚落ち葉を掃き清める単調な作業は、結果として寺院崩壊の速度を弱めることになる。深く純粋な信心に支えられた単調なリズムが、自然のサイクルに合わせて無限に積み重なり、人間の祈りの結晶である寺院を長く存続させていく。遺跡の保護活動というのは、そのようにヒトの心に深く根づいて、自然なものでなければならぬと強く願うのである。

## 部：カンボジアの文化主権はどこに

### 1. カンボジアの文化遺産は誰が責任を持つのか

カンボジアではポルポト時代（1975 - 1979）に約 150 万人の人たちが不慮の死を遂げた。その中には多くの知識人や官吏、教師、技師、保存官など当時の指導者階層が含まれていた。1993年の新政府成立後からはユネスコの傘下で10カ国11機関がアンコール遺跡の保存修復、調査研究の手伝いをしている。それは現在のカンボジアでは専門家が不在で、技術が未熟で、財政的に苦しいという理由である。実際のところ、保存修復の国際オリンピックの様相を呈している。

カンボジアの文化主権、カンボジアの文化遺産は誰が守るのか。これまでのように国際的な援助がいつまでも続くわけではない。やはりカンボジア人自身が民族の名において保存・修復・研究するべきである。カンボジアの文化や伝統を発展させ、持続していく責任は誰が持つのか。これもやはりカンボジア人が全責任を負わねばならない。

アンコール遺跡の保存修復活動は国際的なショー・ウィンドウでもある。各国が手伝っている、いかにもやっているところを見せようとする保存修復も、同じくその国の国内外に向けてのショー・ウィンドウ的色彩が強い。それはあくまでもそのカンボジアの文化主権を尊重してのショー・ウィンドウである。いずれにしてもアンコール遺跡の最終的な責任は、カンボジア人が持つということである。

村に行ってみると感じるが、アンコール遺跡の浮彫りに刻まれている一部の情景や歴史的景観が周辺の田地とともに残っている。パゴダの切妻壁の木彫浮彫りはアンコール時代を彷彿させる図柄構成であった。

1997年のフンセン派とラナリット派がプノンペン市郊外で武力衝突した時、アンコール遺跡援助団の多くの外国人たちは突然に休暇と称してバンコクに出てしまい、遺跡の現場にはカンボジア人以外誰も残らなかった。

私は1980年にカンボジアに入った。現在では国際社会や遺跡の専門家が口を開けばアンコール遺跡がどれほど重要な文化遺産であり、そのために寝食も忘れて保存修復をやらねばならないと公言している。それならばどうして遺跡が荒廃していた1980年からの困難な時代に誰も救済に手を貸さなかったのか。それにはヘンサムリン政権が傀儡政権だからという政治的な理由だけであろうか。しかし、私はアンコール遺跡の崩壊の状況をユネスコ、日本政府、国連などの関係機関に訴え、救済を求め続けてきた。

しかし、残念なことは、こうした「S.O.S.アンコール」に応えて、アンコール遺跡を救うために個人的に一人でもあるいは二人でも、ボランティアで入国できるのに、誰も入ってこなかったことである。そしてようやく1993年に国交が正常化されると色々な国や機関、専門家たちがどかどか入ってきた。もっと早く心ある専門家が入ってそれなりの保護策をつくり実施していたならば、アンコール遺跡が世界危機遺跡の一つに指定されていることはなかったと思われる。

そして現在、各国が保存修復の手助けをしている。それは評価いたしたい。ただ、そこで重要な観点はカンボジア人たちが自前発掘・自前修復ができるようにプログラムを組み、その将来を考えて実施されているかどうかである。「カンボジア人による」ということは、誰が主人公なのかということを明確にし、それぞれの立場で再考する必要がある。

私たちはカンボジアで仕事をしながら学んでいる。もちろん日本が資金やノウハウは提供しているが、私たちは事実上アンコールの保存修復をめぐってたくさん学ぶことがある。私たちは謙虚な立場に立って文化協力を続けている。カンボジア人たちの文化主権というものを尊重し、カンボジアから学んでいくということがその基本にあるのではないだろうか。

## 2. 1908年当時のアンコール・ワットの原風景を求めて

アンコール・ワットの第一塔門からあたりを見渡すと、オオギヤシの数本の樹林の遠くに広い天空を背景として5尖塔が峻立し、荘厳な信仰に似た渴仰の気持ちが湧いてくる。これは現在の風景であって、往時の原風景はどのようなものであったのか分からない。黄金に輝いていたと思われる。一つ想像できるのは、タイ王宮のエメラルド仏寺院のような雰囲気ではな

いだろうか。

アンコール・ワットのまわりは幾重にも門前町的なたたずまいが形成され、木造の高床式の家宅がびっしりと建ち並び、市場では色々な商品が売られ、呼びかける声が飛び交っていたのではないだろうか。そして境内は熱帯の樹林やオオギヤシが生い茂っていた。

木造の家々は長年の歳月で消え去り、アンコール・ワットには洪水による土砂が流れ込み、そこに下生え<sup>したば</sup>が生い茂り、巨木や樹木が密生し、一部の場所では現在タ・ブローム寺院に見られるようにガジュマル系の大樹に覆われていたと思われる。少なくとも現在のアンコール・ワットは他のアンコール遺跡に見られるように、樹木もほどほどに切り取られ、すっきりとした見通しのきく感じの小ざれいな遺跡ではなかったといえる。

1908年にフランス極東学院の保存官として赴任してきた J.コマイユ氏は、ワット境内の西参道第一塔門を越えたところの十字型テラスに足掛けした形の高床式家屋に住み、事務所兼住居としていた。作業日誌を読むと、コマイユがまず着手した作業は、下生え<sup>したば</sup>や樹木の取り除きであったと報告している。カンボジア人作業員を動員して、境内随所に流れ込んだ土砂を取り除き、整地したと記録している。そして密生したオオギヤシの樹林を間引きし、見通しのきく広い空間を作り出した。整地したところに芝生を植え、作業員に雨季の後何回か刈り込みをさせた。どちらかというところ現在のアンコール・ワットの光景は1908年からいろいろ手が増えられ人工的に作り出され、小綺麗に清掃され、天空に聳<sup>そび</sup>え立つ尖塔の威容を演出したものである。アンコール・ワットは建立以来うち捨てられて廃虚になることはなかったが、それでも約800年にわたり境内には樹木が密生してしまっていた。1431年頃の王都陥落の後、アンコール・ワットには戦禍のため一時期は人々は寄りつかなかった。その後、上座仏教寺院に衣替えをして現在まで近隣の村人たちの仏教の聖地として存続してきたのである。

私たちはアンコール・ワットの前に立つとその大伽藍の壮大さに眼が奪われ、オオギヤシの樹木が数本立ち並び、ワットの尖塔の高さをより視覚的に演出している。これまで私はまわりの景観についてはあまり気を払わないで過ごしてきた。アンコール・ワットの保存修復作業はフランス植民地時代を含めて1971年のフランス人専門家撤退まで63年間にわたりフランス人主導のもとに実施された。そしてフランスの高い技術と文化がアンコール遺跡の保存と修復に貢献してきたと、フランス人は世界の人々へ誇ってきた。しかしその保存と整備の具体的作業は、フランスならではのものではなかった。コマイユをはじめとするフランス人保存官たちは無意識のうちにフランス的な美意識に立脚して、一般向けのする清潔なイメージの大伽藍として演出されてきたところがあるのではないか。そう感じている。

これは私見であるが、ベルサイユ宮殿の裏側のトリアノン宮殿を思い出していただきたい。そこには大小の池があり、きれいな大樹がところどころにあり、そこは広い見通しのきく空間である。アンコール・ワットの整備にあたってコマイユは、無意識のうちにベルサイユ宮殿の整備の原型が頭の中にあっただけではない？ フランス人としてのコマイユの美意識が本能的にそうさせたかもしれない。

こうした美意識についてはどこにも誰もこれまでに言及していない。そこにはフランス的美意識が背景にあったと思われる。同時にそうした微妙な美的感覚が反映してしまうほど、遺跡

の整備保存はデリケートであることも感じた。フランス極東学院が63年にわたりアンコール遺跡の保存修復とカンボジアの歴史の形成などに貢献してきたことは、評価したい。しかしながらその保存修復にはカンボジア人的感覚が優先されるべきであるのにカンボジアの風土の中で培ってきたカンボジア人の五感と美的感覚が生かされておらず、フランス方式の美的処理である。

### 3. カンボジア人の美意識はどのようにつくられるか

例えば、日本の伊勢神宮をアメリカ人の保存官の手により修復されたりしたならばどうであろうか？ やはりアメリカ方式の技術とその手法でそれ以後ずっと実施されていく。修復技術もその国の方式をそのまま踏襲<sup>とうしゅう</sup>していくことになる。厳密に往時のままと尊重して修復するとはいうが、やはり微妙なところで美意識やアメリカ流の合理主義的な美の概念が出てしまうのではないだろうか？ フランス人はカンボジア人ではできないから私たちフランス人がやっていると公言する。フランス極東学院のやり方を考察してみたが、大局的に見ればフランス文化方式の押し付けであり、修復の技術体系もフランスに隷属<sup>れいそく</sup>することになる。

アンコール遺跡は差し迫った倒壊の危機に直面しており、さらにカンボジア人保存官の不在という緊急的な出来事が重なっているため、各国の保存修復チームの作業をとめるわけにはいかない。自然倒壊と放置により遺跡が倒壊するよりも、それを事前に保護することが良いに決まっている。

現在アンコール遺跡には8カ国9チームが入っており、それぞれが修復活動を実施している。これら私たちを除く8チームは最大限に遺跡のオリジナルな部分を尊重しながら実施していると言うが、果たしてどこまでカンボジア人の感覚に近づけて忠実に修復できるのか。

私たちは修復作業員として近隣の村人たち65名を雇っている。彼らの職種は石工、穴掘り人夫、作業員、清掃員などである。私たちは1999年3月から発掘のたびごとに近くの村人や小学生を対象に発掘現場説明会を開催している。カンボジア人研修生が説明し、写真や図面を大きな看板に貼り付けカンボジア語でこの遺跡はどんな意味があって今回はこんな出土品があったと、現物を見せ手に触らせている。なかなか好評であり、それが村人との対話のきっかけとなっている。さらにこうした説明会がやがて文化遺産教育につながり、祖先の創った大伽藍を誇りに思い、アイデンティティの萌芽<sup>ほうが</sup>になっていくことを願っている。やがて村人たちはそれを「石の家」とは呼ばなくなるだろう。これまでにたくさんの国から保存修復チームが入ってきて、大きな宣伝の看板を出している。狙いは外国人観光客向けのものである。どのチームも近隣の住民たちにこの遺跡は何で、どんな意味があるかという説明会を開催したことはない。

文化遺産の価値の根源には、その民族が持ち続けてきた美意識や審美観があり、遺跡や無形文化財などはその意識に基づき創造された往時の芸術作品と言わねばならない。このカンボジア人の美意識には彼らの感覚・表象・思考・意志などが塗り込められており、言うなればその長い年月をかけたカンボジア的価値の創造の結晶がアンコール・ワットである。村人たちは小さい時からそこに住み、風・太陽・気温を五感で感じながら成長してきた。

#### 4. カンボジア人の「美」の基準は何か？

アンコール遺跡は壊れた建造物であり、その中に往時の最高の価値に立脚した美術表現や祈りの気持ちが凝集されている。確かに「国破れて山河あり」的感覚で、壊れたものへの「美」に共感し、その存在価値を「もののおはれ」的に見出すという日本的な美意識もある。そこには感情的な好き嫌いの気持ちもある。信仰を介して最高価値の気持ちを表現していく手段として空間処理されたものが建造物となるのであろうが、年月を経て遺跡となったのである。そこには当時の最高の精神価値体系が塗り込められており、民族的・文化的・地域的特色が顕示されている。それを解明して理論的に立証をしていく。そこには究極的に民族の存在を問う、また人間を問う根源的な哲学が背景にある。事例を挙げれば、1820年に発見された「ミ口のヴィーナス」も古代ギリシア彫刻の最高傑作であり、そこには古代ギリシアの美の基準が示され、ギリシア哲学の美的固定の表現物である。

アンコール・ワットはカンボジア人の五感に立脚し、五感が沸騰して大尖塔、大階段、大回廊を建立したのである。カンボジア人的美的固定観念は、同民族の身体の中に染み込み、血の中に入っている。

それでは現存する織物や彫刻、壁画、柱などの装飾模様や形・文様について考えてみる。

アンコール遺跡は、その壁面という壁面が全て壮麗で秀美な装飾彫刻で埋め尽くされている。建物全体がちょうどレースのヴェールで覆われているような錯覚を覚える。つまり寺院や祠堂が基壇から塔頂まで、どこの石の上にも、また塔身や屋藍のどの部分にも浮彫りと細かい模様が施されている。その精緻な模様装飾と浮彫りは圧巻である。

クメールの模様は外形的に複雑に見えるが、よく見ると主要ないくつかのモチーフから成っている。例えば、唐草、渦巻き、蓮の蕾、花卉、花枝などの装飾模様に分類することができる。これらがクメール模様の特徴の一つとなっている。さらにこれらの模様に加えて、小さな人物像や様々な動物像が線状あるいは幾何学模様に割り込んでいて、装飾模様に独特な趣を与えている。

アンコールの大地に生息する動物類および主要植物などがクメール装飾に選択的に取り入れられ、賑わいを添え、同時に躍動感を作り出している。クメール模様で最も多く見られる唐草形装飾模様は、9世紀から柱の装飾に多く使われ、初期には肉厚であったが、アンコール・ワット時代には薄肉になり、時代とともに退化している。

次に多い模様には、やはり9世紀後半から山形に配置された巻葉模様がある。この山形装飾模様には、三弧アーチに囲まれた小人物像が描かれたりする。またアンコール・ワットの柱にはS型懸垂鎖模様があり、中央に小人物像が配されている。アンコール時代の模様は、主として柱、窓枠、出入口の枠柱、破風の縁飾り、まぐさ、偽扉などに刻まれている。モチーフ別に見るならば、丸紋、丸紋唐草、輪違い、唐草などの模様がある。

丸紋模様は植物、四弁花などが主要なモチーフとなり、細倣に作られている。丸紋唐草模様は、唐草と円内に人物または動物を描いている。輪違い模様は円弧が少し間隔をあけて交わり、中央に四花卉を配している。唐草模様はその蔓が円弧に近い線を描き、巻いた蔓の先端は下方より小人物像もしくは動物を抱え込んでいる。

## 5 . 輪廻転生の思想から美術が誕生する

これらの装飾模様と彫刻などはどう見ても彫工や図工たちの奔放な想像力によるものではない。これらの多彩な模様は、自然と人間が一体という世界観、どの動物も生死を繰り返す一つの姿形に過ぎず、生き物は全て流転があり、ついには絶対者と合体するのである。要するに、クメールの装飾美術の源泉とその表現形式は、伝統的かつ哲学的な理論を踏まえており、永遠に転生し続ける自然の法則に基づいている。この美術表現の精神的背景は、やはり輪廻の思想にその根源がある。こうした転生思想から考えるならば、その豊かな美術表現と同時に過剰な溢れんばかりの造形装飾美術に納得するのである。

モチーフの変容の中には、植物から動物へ、またその逆に動物から植物へ変化する模様もある。そして、渦巻き模様の中に小鳥が入っていたり、あるいは蛇神ナーガに置き換えられたりしていく。小人物像は輪廻観の一つの表現形式となっている。小人物像が他の模様と重複凝集している構図は、西欧ルネサンス期の装飾にもあるが、クメールの構図は模様と一体になって描かれていることが特徴である。アンコール時代の壁面装飾では人物、動物、花などが極限まで様式化されている。

クメール装飾の特徴は、いつも全体に調和がとれていて、その曲線は優雅なカーブを描き、波打ちながら図像表現を繰り返して行く。浮彫りのデヴァター（女神）像を見ても、身舎壁の表現をあまりにも深く掘り込まずに制作している。

植物模様は寺院装飾としていたるところに使われているが、その中で頻繁に、様式化されて描かれているのが蓮の花である。それが蕾<sup>つぼみ</sup>であったり、また満開の蓮花や花枝だったりする。この聖なる場所の演出をする植物は、神話の図像表現に欠かすことのできないモチーフである。パイヨン寺院の四面仏顔は頭上部に蓮花の王冠髪飾りを戴いている。カンボジアでは、この蓮の花は唐草模様や他のモチーフの組み合わせで模様と対になっていることが多い。

例えば花びらを一列に並べて神像の台座の浮彫りに使われている。壁面の浅浮彫りでは、蓮は自然のままの図形で描かれ、そこが池水や湖であることを暗示している。つまり蓮は水の象徴なのである。パイヨン寺院の主柱の浮彫りや仏龕<sup>ぶつがん</sup>には、アプサラスや舞姫の姿を数多く見かけるが、これは水辺あるいは池淵を意味するのである。パイヨン様式の建物では蓮花の花弁の上に片足で立っているアプサラスは、上手にバランスをとっている。アンコール・ワット寺院などに多いデヴァターは、蓮の花枝を手にして立っている。

これら多種多彩の装飾は、一つの美の基準を例示しているといえる。種々の模様は同じ大きさ、同じ形状を下から上へ繰り返し彫り込んでいく場合を多く見かける。特に織物の模様には繰り返しが多く、それで一つの美しい布地を作り、上品な形状を作り出している。

カンボジア人はどうも同じ形状の浮彫りなどを並べることで美しいと感じているようである。第一回廊の乳海攪押の浮彫りは綱引く人物の繰り返しが多く、私は単調で図像学的にはあまりいただけないと思う。しかしながらカンボジア人は最高に美しい絵図として評価している。女性が着る民族衣装は繰り返し模様の多い図柄を上下に着て女性としての品格が醸<sup>かま</sup>し出されている。実に見事である。カンボジア人の美の基準は宗教的背景に基づき同じ模様を並べることにより美意識概念が形成されている。

## 部：なぜ上智大学がアンコール遺跡の保存修復を手伝うのか - 人材養成プロジェクト -

### 1. アンコール・ワットはカンボジア文化の結晶

カンボジアは、かつてイラクと同様の戦争状態を何度も経験してきたにもかかわらず、首都プノンペンの国立博物館が略奪されるような事態には至らなかった。同博物館に展示されているアンコール美術の粋をカンボジア(クメール)民族に帰属する至宝と考えたからであろうか。

私は、プノンペンとアンコール遺跡を往復しながら、この半世紀、カンボジアという国を見続けてきた。独立、国家建設、内戦、ポルポト問題、パリ和平、脱社会主義、市場経済の導入、貧困撲滅など、カンボジアは常に国際政治力学に翻弄されてきた。特に両隣の大国タイとベトナムとの関係には注意を払わなければならなかった。

メコン河畔に拓けたプノンペンは、かつては小パリと言われるほど瀟洒で清潔な街だった。そのプノンペンで2003年1月29日、タイ大使館とタイ系資本の会社、ホテルが焼き討ちされた。「アンコール・ワットをタイへ返せ」と、タイ人女優が発言したと伝えられたのがきっかけだった。カンボジア民族の誇りが傷つけられたのである。

アンコール・ワットを含む3つの州がタイから返還されたのは1907年のこと。約500年ぶりのことだった。ただ、1941年には日本政府の仲介でタイが一時アンコール・ワット地域を取り戻したことがある。日本も今回の事態には間接的に関与しているのである。

アンコール・ワットのある街シェムリアップの地名には「シャム人を平定した(ゴザのように平らにした)」の意味がある。タイ人の解釈では「シャム人が整えた」町の意味であるという。どちらにしても互いに根強い嫌悪感を抱いていることがうかがえる。タイ人も、この町の名前から誤解しているのかもしれない。

近年のタイ資本進出による不満も背景にある。カンボジアではタイの通貨パーツで買い物ができ、経済的には事実上タイに従属している。カンボジアの一人あたりの国民生産はタイの7分の1しかない。こうした状況が一つの原因となって、「タイ人はいつも我々を見下している」という反タイ感情として爆発し、今回の焼き打ち事件となったのであろう。

アンコール・ワットはカンボジアの国旗や紙幣にも描かれている。カンボジアとアンコール・ワットは切り離せないものなのである。アンコール遺跡群は明らかにカンボジア民族の至宝であり、今やカンボジアにとって貴重な観光資源である。タイが経済でいくならカンボジアは文化立国で、という

ように、持ち味を生かした国造りが必要なのではないだろうか。

アンコール・ワットは天空に聳え立つ巨大な石造伽藍である。訪れる人にある種の衝撃と感動を与えるこの遺跡は寺院としての役割を終えた後も、そこに魂が吹き込まれ新たな信仰と哲学を呼び起こしてきた。その新しい魂がカンボジア人のアイデンティティとして結晶している。

アンコール遺跡には遺跡自体の中に往時の人たちの願いや祈りが塗り込められ、そのメッセージが届けられている。プノンペン博物館に集められたクメール美術の神像や仏像の尊顔を間近に見ると、信仰の深さ、愛すること、労働の苦しさ、死の哀しみなど人間の様々な感情を

そこに読み取ることができる。時空を超えてどんなに科学が進歩しても、人間のこの本質は少しも変わっていない。文化遺産とは「人間とは何か」、「人間はどこへ行くのか」を深く考えさせる存在である。民族が持ちつづけてきた美意識や哲学に立脚したものだからである。

## 2. 鎮魂の意味を込めて開始された上智大学人材養成プロジェクト

カンボジア西北部のシェムリアップ市郊外には世界的に有名なアンコール・ワットをはじめ、主要な遺跡 62 ケ所があり、ちょうど東京 23 区ほどの広さである。そこは約 550 年にわたりアンコール朝の首都であったところで、各時代の王たちが造営したたくさんの寺院・僧院・祠堂・貯水池・橋などの大道跡が集中してみられる。ほとんど現存する遺跡保は石造りである。

私たちはアンコール遺跡を破壊から救済するため、1980 年からシェムリアップへ出かけ、応急保護工事などを手助けしてきた。国交がないにもかかわらず、後の上智大学アンコール遺跡国際調査団が入り、日本として初めて遺跡の保護活動を開始した。上智大学、ユネスコ、フランス極東学院、ワールドモニュメントファンド、インド考古局の枠組みを国際協力版に切り換える遺跡救済国際会議が 94 年に東京で開かれ、それ以来プノンペンもしくはシェムリアップにおいて日仏大使およびユネスコの主催による「アンコール遺跡国際調整会議 (ICC)」が継続されている。

現在日本からは上智大学アンコール遺跡国際調査団および政府アンコール遺跡救済チーム (JSA) が遺跡の保存修復工事および調査研究を実施している。カンボジアでは 1970 年から内戦に入り、国連の PKO 活動が始まる 1993 年までの 24 年間にわたり国内は内戦のため混乱し、そのために遺跡の保護活動が止まり放置されてきた。しかし、カンボジア側は平和になったからといってすぐに保存修復の仕事が始められるわけではない。さらにカンボジアは 1980 年から 1989 年まで 10 年あまり内戦中ではあったが、タイ国境付近にいた同床異夢の三派連合政府や実効支配中のヘンサムリン政権もアンコール遺跡群の保護と救済には同意していたので、私たち調査団は「文化遺産の修復」という錦の御旗を掲げて、食糧も十分でないカンボジア人作業員と共に毎日数ヶ所の遺跡を駆け回っていた。

アンコール・ワットをはじめ、これらの文化遺産はカンボジア民族の誇りと伝統の象徴である。しかしながら、カンボジアではポルポト政権の時代 (1975 - 79) に、遺跡の保存修復の専門家約 36 名がほとんど不慮の死に追いやられた。それは西欧の思想や言葉に毒された知識人抹殺政策であった。遺跡調査・保存修復する専門家がゼロになってしまったのである。

個人的なことを言わせていただければ、1961 年から一緒に遺跡の保存修復に取り組んできたカンボジア人同僚たちが無念遣る方無い<sup>むねんや かたな</sup>思いで死んでしまったのである。アンコール遺跡の修復に私を<sup>か</sup>駆り立てるものは、彼らに対する鎮魂<sup>ちんこん</sup>である。なぜ上智大学がカンボジア人の文化遺産専門家を養成するのかという理由をご理解いただけたと思う。

アンコール遺跡の保存修復事業はカンボジアの人たちの精神的復興の一助となり、本当の意味での自負と自信を取り戻す一つの契機になることを願ってきた。そして観光事業などにより得られた経済的収益は、その国 (地元) に還元され、調査研究と保存修復のイニシアチブ発揮に役立つと同時に、経済的自立と地域発展の一助にされなければならない。

### 3 . カンボジア人保存官候補の人材養成が始まる

上智大学アンコール遺跡国際調査団（以下調査団）は、前述のとおり 1980 年から遺跡保護の応急工事などを手伝ってきた。応急工事といっても石材の落下を防ぐ支柱を立てるとか、遺跡内にたまった水を竹ぼうきで掃き出すとか、植物の下生えしたばを除去するとか、カビを取るとか、村人たちを動員して急編成された作業員の手による保護活動であった。

カンボジア人の緊急人材養成プロジェクトは、平和のきざしが見えてきた 1991 年 3 月から始まった。それは考古発掘調査および保存修復を指揮できる将来の遺跡保存官および中級レベルの技術をもった幹部技官と石工の養成の三本立てで始まり現在も続いている。

プノンペンの王立芸術大学考古・建築両学部の学生の現場研修は、バンテアイ・クデイ遺跡で実施され、現在も続いている。1991 年と 1992 年は調査団の先生方が芸大で集中講義を行い、学生約 300 名の中から 20 名を選抜してアンコール遺跡の現場に入り、考古学と建築学の実習を実施した。彼らは 1993 年から毎年 3 月・8 月・12 月の調査団に参加し、調査団の先生方から、より実践的な現場実習の指導を受けてきた。これらの学生は、芸大が再開されると同時に入学してきた学生たちであった。上智大学では、彼らが合宿して講義を受け、研究室があり、出土品の処理や図面作成ができるアンコール研修所（2 階建て、約 290 m<sup>2</sup>）を 1996 年 8 月に建設した。

芸大卒業後彼らの内から 10 名を第一期の研修生（スタッフ）として採用した。彼らはこの研修所に出勤して課題をこなし、引き続き日本人の先生方の指導を受けてきた。月給も支給されている。これまで実習に参加してきた研修生の中から順次選抜され、文部省留学生および奨学財団の奨学生として来日し、上智大学大学院と東京芸術大学大学院において学位を取得するため研究を続けている。彼らは修士・博士両課程においてアンコール遺跡研究やカンボジア自国研究に取り組み、学位論文を書いている。すでに 2002 年 3 月にオムラビ氏が博士号を取得し、プノンペン大学の教授として教壇に立っている。

### 4 . カンボジアの歴史を塗り替える大発見

#### ーカンボジア人保存官候補者たちの手で発掘ー

考古発掘実習を始めて 10 年目にあたる 2001 年 3 月、偶然にもこの境内から 106 体の仏像が発掘された。さらに同年 8 月には 167 点の仏像とその破片が出土した。加えて座仏が四面に 1008 体刻まれた千体仏石柱も発見された。埋仏の時代は 11 世紀から 13 世紀であり、大部分が 12 世紀後半からのパイヨン美術様式に属し、三重のナーガ（蛇神）の胴体上に鎮座した典型的なアンコール仏である。

発掘状況から考察すると、深さが地上から約 2 m、底面一辺が約 2 m の四角の穴が掘られ、底面の中心部に小仏や頭部など破片が集められ、その外側に胴体など大型石片が埋められ、そして土砂をかけながら突き固められたことが判明している。これらの埋仏は埋められる前に頭部と胴体が切断されたらしく、同一個体に復元できるものは多くない。しかしながらこれら埋仏は約 800 年にわたり温度も湿度も一定であったため、保存状況は極めて良く、高貴で美しい尊顔を拝むことができた。

2000年8月発掘の小仏1体を併せると、合計で274体が発見されたことになる。1860年のフランス人博物学者アンリ・ムオのアンコール遺跡報告から140年あまり経ったが、今回のように274体もの大量の廃仏および千体仏の石柱が発見された例はない。

なぜこうした廃仏事件が起こったのか？ ジャヤヴァルマン7世(1181-1219頃)は、アンコール王朝の中で最も多くの寺院を建設し、空前のアンコール王朝の栄華をつくり出した偉大な王である。王は強権を発動してそれまでのヒンドゥー教を退け、仏教を国家鎮護の宗教に据え、立国の思想を変更した。一種の宗教改革であった。ジャヤヴァルマン7世の逝去後、1220年頃登位したインドラヴァルマン2世も、仏教徒もしくは仏教を容認していた王であった。ところがその次に即位したジャヤヴァルマン8世(1243-1295)はシヴァ神を篤信していたと思われる。その結果、この王の統治下において反仏教運動が起こり、仏像狩りが行なわれたのであろう。例えば王位継承などをめぐる権力闘争をきっかけに、シヴァ派もしくはヴィシュヌ派の人々が国内の仏教寺院の仏像を打ち壊し、棄てたのではないだろうか。アンコール研究の泰斗フランス人G・セデスはインド系宗教の特徴として、諸派の混淆的傾向、ヒンドゥー教と仏教がどこにあっても平和裡に共存していたと指摘してきた。ジャヤヴァルマン8世は仏教信奉の前2代王の残余勢力と闘い、勝利して登位したのであろう。

これまで100年余にわたり、フランス人研究者たちにより組み立てられた通説は、ジャヤヴァルマン7世の40年間にわたる寺院建設のせいでアンコール王朝は衰退し、15世紀になってアユタヤ朝に滅ぼされたというものであった。今回の発掘は、アンコール王朝が疲弊するまま衰退したという通説を覆すこととなった。

今回の大量の廃仏の発見で、ジャヤヴァルマン8世の統治下でもそれなりに通常の政治が機能し、国内の繁栄が維持されていたことが明らかになってきた。1296年にカンボジアを訪問した中国人周達観による『真蠟風土記』の記述も、王朝の危機的様子は描かれていない。

これらカンボジアの国宝の大発見は、地道な10年にわたるカンボジア人保存官候補者の研修最中の出来事であり、彼らの手で発掘されたことを喜ぶたい。私たちの研修所が掲げる哲学は「カンボジア人によるカンボジア人のためのカンボジアの遺跡保存修復」である。今回の大発見はまさしくこの哲学を現場で実践したわけである。

## 5. 保存官養成を兼ねた調査団の主な活動概要

建築班：アンコール・ワット西参道修復工事石積み作業中

地質班：バンテアイ・クデイ遺跡の地下地盤の砂岩調査、共振法による石材診断、アンコール・ワット西参道地質調査、ヘリコプターによるカンボジア地形調査、遠隔地5大遺跡地質調査と報告

考古班：バンテアイ・クデイ遺跡274体廃仏発掘およびインベントリー作成、引き続き千体仏石柱を発掘、東参道の予備調査、東参道脇小祠発掘調査、遠隔地5大遺跡考古学予備調査

窯跡班：B1窯の発掘調査・研究、B4窯のトレンチ調査、出土品の整理・目録作成・公式報告書作成・窯跡保存公開事業(アプサラ・奈良国立文化財研究所と共同事業)、プノ

ン・クレーン丘陵の窯跡地調査、窯跡発掘のための中堅幹部人材養成プロジェクト  
 水利環境班：歴史水利都市調査研究、シェムリアップ川水質検査、トンレサップ湖水質検査  
 プオック川・ロリュオス川流域調査、トンレサップ湖浮稲調査など  
 村落・社会班：5 ブームにおける農村調査、老人の社会活動参画プロジェクト、文化遺産教  
 育、国立公文書館の教育関係資料調査、カンボジア社会復興調査・フランス  
 植民地下のカンボジア社会研究、アンコール遺跡保存政策研究など  
 民話・伝統文化班：村落の口承伝承調査研究、寺院壁画調査研究、民話絵本2冊目および民  
 話を小学生の副読本作成するプロジェクトなど  
 遠隔地文化遺産調査班：コーケー、コンボンスヴァイ・プリアカーン、サンボール・プレイ・  
 クック、ペンメリア、バンテアイ・チュマル、プリア・ヴィヘア  
 など  
 小学校リュック・ミッション班（ボランティア団体と共催）：シェムリアップ州小学校へ手  
 作り、リュック・サック寄贈プロジェクト（鉛筆、ノート、  
 消しゴム、サンダル、定規など封入）

## 6．人材育成プロジェクトの実績（2003年現在）

学位取得のための大学院教育プログラム：～

Qum Ravy（女）：2002年3月上智大学大学院地域研究専攻においてカンボジア人で

第1号の博士号（地域研究）取得。現在ブノンペン大学助教授

Ly Vanna（男）：2003年3月上智大学大学院地域研究専攻においてカンボジア人で

第2号の博士号（地域研究）取得。現在上智大学アジア文化研究所共同研究員

Hor Sukuntheary（女）：上智大学大学院地域研究専攻博士後期課程。現在王立芸術大学助教授

Neang Sivutha（男）：上智大学大学院地域研究専攻博士後期課程

Nhim Sutheavm（男）：上智大学大学院地域研究専攻博士後期課程

Keo Kinal（男）：東京芸術大学大学院文化財保存学専攻博士前期課程修了。現在文化芸術省保存局局長

Tin Tina（男）：上智大学大学院地域研究専攻博士前期課程

Som Visoth（男）：上智大学大学院地域研究専攻博士前期課程

2000年度～2002年度神奈川県海外技術研修事業（神奈川県国際研修センター）

Chhean Ratha（男）：コンピュータ製図研修 期間：2000年5月～2001年3月

Som Visoth（男）：博物館学陳列方法論期間：2001年5月～2002年3月

Mao Sokny（男）：コンピューター応用建築石積み研修 期間：2002年5月～2003年3月

Phou Sochea（男）：コンピューター製図研修 期間：2003年5月～2004年3月

2001年度徳島県海外技術研修（徳島県埋蔵文化財センター）

Nuon Mony（男）：考古測量期間：2001年7月～2002年3月

研修所における長期中堅幹部研修プログラム

考古学研修生（スタッフ）4名、建築学研修生（スタッフ）6名、石工研修生14名、アンコー  
 ル・ワット西参道修復現場作業員30名。研修場所：アンコール研修所および西参道

アジア・ユース・フェローシップ(AYF)プログラム(日本国外務省)

Ek Bunta(男):上智大学大学院地域研究専攻博士前期課程卒業。

現在文化芸術省国際局副局長兼王立芸術大学講師。

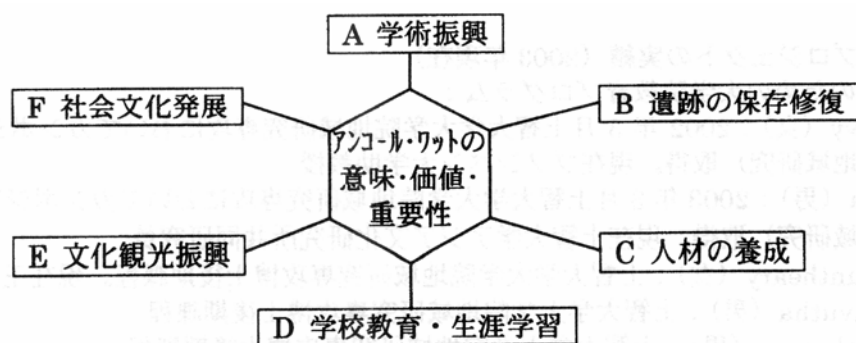
## 部: アンコール-ワット環境教育プロジェクト

### 1. 遺跡-住民-自然環境の共存プロジェクト -伝統的文化の復興も-

私たちは遺跡の保存・修復だけすればよいと考えているのではない。遺跡の周辺で生活している村人たちの村落社会の発展と伝統文化を再興するプロジェクトを続けている。遺跡保存修復と併せて、住民-自然環境を考えるプロジェクトを1991年8月から始めている。近隣の森林の自然環境の調査(植物生態など)、バンテアイ・クデイ遺跡周辺の村落の農業調査や水利。水質調査などが地道ながら実施されている。

さらにシムリアップ州の無形文化財についての調査研究、特に小型影絵芝居、トロット(鹿頭行列)などのインベントリー作成調査が続けられている。民話の採話も一つのプロジェクトである。特に北スラ・スラン村の経済・社会調査や伝統文化の調査成果が積み上げられている。これらは息の長い調査・研究であり、その方法論は「遺跡エンジニアリング」といって歴史と文化資源をどのように活かすか。村人たちが参画して遺跡と住民が共存共生するというプロジェクトが実行に移されている。

文化遺産は、祖先が生活を営んだ証しである。それは現代人が豊かな社会を想像するために必要な歴史的文化的な資源と見なすことができる。文化遺産には当時の社会、宗教、価値観、政治、経済、科学、技術、自然などに関する様々な情報が含まれている。文化遺産を保存することは、それらの情報も保存することになる。文化遺産が保存されていれば、そこに秘められている情報を引き出すことができるし、文化遺産の学術的調査研究によって新たな意味や価値を付加することもできる。文化遺産を有効活用するためには、遺跡に社会的な役割を与えればよい。そうすれば、文化遺産は再び現代社会に生き生きと甦ることができる。そして、文化遺産が持っている社会的な意味、価値、重要性はますます増えることになる。



## 2. 私たちの方針と哲学にもとづく文化復興協力

私たち調査団には日本の10大学と5機関が参加し、次のような方針と哲学を掲げて活動している。

第1：カンボジアの文化遺産はカンボジア人の手で責任を持って守ること。カンボジアの文化遺産はカンボジア人の保存官が保存修復し、これを後世に伝えていくべきであるという考え方にもとづき、遺跡を守る専門家（保存官と幹部技官）の養成が12年目に入っている。カンボジアの学問的自立を援け、自国の文化主権について発言できる人材が育ちつつある。

第2：文化遺産の調査・研究と保存修復事業の密なる連動。保存修復事業は破壊箇所を直して後世に伝えればいいというだけでは不十分である。それら遺跡がどの時代の、どんな材料で作られ、そこに塗り込められた当時の価値観やその精神的背景、その宇宙観、様式などの科学的解明にもとづかない修復は本来のものを破壊することになる。つまり、綿密な学術調査と研究に連動する保存修復でなければならない。

第3：遺跡保存の修復研究における中・長期的展望の必要性。中期および長期的なマスタープランによって保存修復活動が続けられなければならない。長期とは30年、50年という単位で保存修復の作業を継続し、伝統工法や技法を再発見し、評価し、それを現代技術に応用していくということが理想である。遺跡を取り巻く自然環境についても水利灌概や植物・生態環境も長期的な展望にもとづき考える必要がある。

こうしたその地域の文化や社会を尊重しながら文化協力を進めていくという原点を踏まえておかないと、文化遺産の保存協力は決して実らない。むしろ遺跡破壊といわれてしまう恐れがある。私たちがこれまで22年間の経験から得た結論は、「カンボジア人による、カンボジア人のための、カンボジアの遺跡保存修復が必要であるということである。

## 3. 「カンボジア現地に学ぶ」姿勢から文化協力は始まる

こうした文化遺産の研究や保存協力には、発掘手法に習熟した考古学者、修復経験を積んだ建築家、石材を動かせる有能な石工など、まず何よりも「人」の養成から始めなければならない。私たちは王立芸術大学の先生方と協働で人材養成や発掘および修復事業を行なって来た。また、アプサラ（アンコール地域遺跡整備機構）と共同事業も着々と実績を積んでいる。

文化財を科学することは、そこに住む人たちに民族のルーツを考える手がかりを発掘し、アイデンティティの基礎になる資料を提供することである。遺跡などの保存修復に関する国際協力は、そこに暮らす人々の自立を助ける協力が基本でなければならない。文化協力とはぶつかり合い学ぶことである。こちらが善意と思っても、干渉と受け取られる場合がある。活動の8割は現地との折衝や準備に費やされる。だからといって、遺跡を地域社会から切り離し、カンボジア文化の文脈で読むことをせず、修復だけに終始する技術至上主義はやめたい。何よりも綿密な基礎調査や石積み手法などの研究と経験が必要である。

村人や地域住民から学ぶことがたくさんある。影絵芝居を観るとか、民話を聞くこともある。いつ田植えをするとか、どうすれば雨水が抜けるとか、この木の実にはこんな薬効があるとか、

毎日住民から教えられる。こちらが善意と思って現地側は干渉と受け取る場合がある。日本のやり方だけが唯一正しいと思わないほうがいい。こうした文化・摩擦はいい意味での相互理解の始まりだと考えている。

アンコール・ワットはカンボジア民族の象徴である。その保存修復はあくまでも現地の人々の手で将来なされることを願って、人材養成の手伝いを続けている。私をアンコール・ワットに駆り立てる原動力は、不慮の死に追いやられたカンボジア人保存官たちに対する鎮魂の思いである。

#### 4．上智大学アンコール遺跡国際調査団とアプサラ機構

上智大学アンコール遺跡国際調査団（以下調査団）の調査・研究・保存・修復作業は、1980年8月から始まり（予備調査を含む）、内戦の戦塵の中でも継続的に実施された。

約150万人を虐殺したポルポト政権後は、疲れたカンボジアの人たちに生きる希望を与え、民族アイデンティティを取り戻し、荒廃した国家を復興することが急務であった。その社会的混乱を目の当たりにした調査団は、国旗にもデザインされているカンボジアの象徴アンコール・ワットを国家復興の精神的な中核に据えたらどうだろうかと考えた。この考え方はカンボジア政府に伝えられ、シハヌーク殿下（現国王）は1992年12月、ユネスコに対してアンコール遺跡群を世界遺産に登録する申請を行なった。

この登録申請に先立つ1992年8月、上智大学の提唱によりユネスコと上智大学の共同主催「アンコール遺跡の保存・修復のマスタープラン」国際会議がプノンペンで開催された。ここで調査団は アンコール地域の保存は遺跡、森林、住民の共存共生地帯とすること、 広大な地域の保護・開発・管理を一元的に行なう国家機構を設立すべきこと、 人材養成の必要性を強調した。これらの主張が会議で評価され、それがアプサラ機構の創設へとつながった。

カンボジアではアンコール遺跡群99カ所が1992年にユネスコの世界遺産に登録されたが、その際の遺跡の現況調査データは調査団から提供されたものである。ユネスコは登録に際して専門の保護機関の新設を義務づけ、1995年にカンボジア政府のアプサラ機構（Authority for the Protection of the Site and the Management of Angkor Region = アンコール地域遺跡保存整備機構）が特別立法により設立された。カンボジア国会に提案された法案にも、資料として調査団の調査研究データが供されている。このように、アンコール・ワットの世界遺産への登録とアプサラ機構の創設の背景には、この調査団の活動があるのである。さらに付け加えるならば、1980年から約10年間にわたる期間はどの国も専門家や調査団を派遣しておらず、調査団の地道な研究調査データが唯一の記録であり、それらはアンコール遺跡専門家・研究者から高く評価されている。

#### 5．調査団が掲げる

**「カンボジア人による、カンボジア人のための、カンボジアの遺跡保存修復」**

ユネスコは、カンボジアの世界遺産登録申請を1992年に受け付けたが、3年間の猶予期間（仮登録）を設け、その間に保護整備体制を整えるようカンボジアに要請した。その要請の中

にはアプサラ機構の新設があった。そして 1995 年 12 月、アンコール遺跡群は世界遺産に登録されたのである。アプサラ機構では、その広範囲な管轄地域を「アンコール歴史考古公園」と称し、その管理運営に取り組んでいる。

カンボジアに対する支援では「人材養成が」特に大きな鍵を握っている。調査団は当初からカンボジアに協力する基本方針として「人材養成」を掲げてきている。それは 1975 年から始まったポルポト時代に知識人や技術者などの人材が不自然な死を遂げ、国家建設が危ぶまれていたからである。

そこで調査団の教授陣は、遺跡の調査研究の前にプノンペン芸術大学に立ち寄り、学生はいるが教授陣がないという実態を憂慮し、学生たちに 1 週間から 10 日間にわたり集中講義を実施したのである。そして現場実習のため同大学の考古学部、建築学部の学生を同道し、パンテアイ・クデイ遺跡において教育訓練を続けている。こうした、既に 12 年間にもおよぶ地道な考古・建築学に関する教育訓練活動の結果、2001 年と 2002 年には 274 体の廃仏の発掘というアンコールの歴史上の大発見がなされ、しかもその発掘がカンボジア人の若手考古学者たちの手によって行なわれるまでになっている。

こうしたカンボジアとの長年にわたる調査団の活動と実績を踏まえ、緊急な課題となっているアンコール遺跡群の環境悪化問題に対応するため、2002 年 10 月に新設された上智大学アジア人材養成研究センター（1996 年建設の前上智大学アンコール研修所）は、学外共同研究プログラムにより日本品質保証機構（JQA）、国際規格研究所（ISRI）、品質保証総合研究所（JQAI）と協力して、アンコール・ワット環境教育プログラムを申請中である。このプログラムは現地カンボジアのセンターにおいて実施され、アプサラ機構の職員、技官、専門家がその対象とされる。その訓練の後、アプサラ機構はグローバルスタンダードである ISO14001 環境マネジメントシステムを導入することになっている。

## 6. 観光客の急増と駐車場などの整備

カンボジアの貴重な文化遺産であり、ユネスコの世界遺産にも登録されているアンコール・ワットをはじめアンコール・トム、バイヨンなどを含むアンコール遺跡群は、近年日本をはじめ海外から多くの人々の注目するところとなり、訪れる観光客は急増の一途をたどっている。1998 年には約 5 万人、2001 年には約 23 万人、2002 年には約 45 万人もの観光客が訪れた。約 800 年の歴史を超えて、アンコール王朝の繁栄と文化を今に伝える遺跡群の威容とその類稀な美しさが訪れる人々に深い感銘を与えているからであろう。

この観光客の急増は、開発途上のカンボジアにとってかけがえのない貴重な外貨獲得手段の柱になってはいる。しかし、観光客の急増は同時に、急激なインフラ整備として駐車場、トイレ、道路、ホテルなどの新增設が伴っている。観光都市となったシェムリアップ市では、市内を流れるシェムリアップ川には汚水が排水され汚染が引き起こされている。近隣の田地の宅地化・ホテル建設ラッシュが起こっている。これまで遺跡の歴史景観を形成していた田地や樹林が切り開かれている。トンレサップ湖などの急速な環境の劣化も懸念される事態を招いている。既にその兆候が出ているとも指摘されている。

## 7. アンコール・ワット環境教育プログラムから

### 環境保全の ISO14001 の取得に向けて

アプサラ機構は、これまでもバランスの取れた周辺開発に留意しつつ、アンコール遺跡群の保存・修復活動を進めてきているが、今後は環境保全の視点を一層重視することとし、そのため自らの組織の管理運営体系として ISO14001 環境マネジメントシステムの導入を決意したものである。

ISO14001 環境マネジメントシステムは、世界に理解され普及が進みつつあるグローバルスタンダードであるが、現状ではカンボジアには馴染みがない。そこで、2003年5月から日本の下記の3実施機関がアプサラ機構の人材養成を含む ISO14001 環境マネジメントシステム導入などの環境教育活動を、3年間にわたって支援していくことになったものである。

この遺跡を守ろうとする取り組みは、アンコール遺跡群とその周辺環境を、ISO14001 環境マネジメントシステムの活用を通じ、カンボジア人自らのイニシアチブと行動で遂行し、遺跡と住民と森林の共存共生を実現しようとするものであり、フンセン首相以下カンボジア政府の環境保全の願いでもある。この意義深いプロジェクトの実施と発展により、アプサラ機構が自らの発議とイニシアチブにより ISO14001 環境マネジメントシステムを機能するようになれば、今後カンボジアの至宝は一層輝きを増し、より多くの海外観光客を魅了してやまないであろう。こうした環境保全は、住民に誇りを与え、伝統的な固有の村落を守っていくことにもつながっていくであろう。

#### 《関係機関》

##### ・現地カンボジア

アプサラ機構：1995年2月に特別立法により設立された。アンコール・ワット等の遺跡修復、保存と周辺地域の開発、観光、環境保全を一元的に管理する政府機関。

##### ・実施機関

上智大学アジア人材養成研究センター：アジア地域における文化遺産の保存修復や人材養成、さらにアジア地域に生活する人々の自立を支援することを目指して、2002年10月1日に開設した上智大学のセンターである。同センターの本部は、カンボジアのシェムリアップ市にある。カンボジア人の人材養成、周辺地域の環境保全を含めアンコール遺跡群の保存・修復に携わっている。

日本品質保証機構（JQA）：環境調査・測定・評価や ISO14001 の教育・トレーニングシステム構築指導のそれぞれの分野で日本のトップクラスに位置する。ISO9000、ISO14001 に代表される品質や環境マネジメントシステムの審査登録業務のパイオニアとして、情報セキュリティマネジメントシステム（ISMS）、適合性評価制度、BS7799 による審査登録、また製品安全認証業務、環境分析業務、測定器の構成業務など、幅広い分野で総合力を発揮する中立公正な第三者機関である。

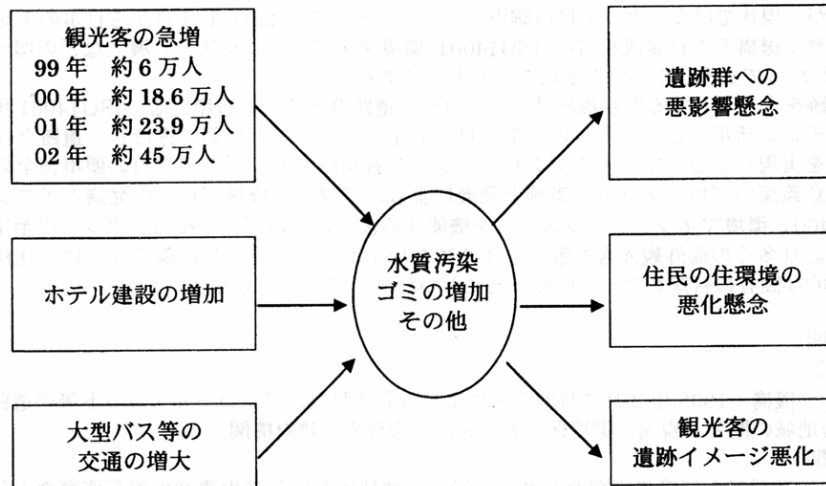
(株)国際規格研究所（ISRI）：日本最大の国際規格（ISO9001、ISO14001 等）認証取得コンサルティングファームで、100名超のコンサルタント全員が ISO 審査員資格を有しており、豊富な審査経験に裏打ちされてハイレベルなコンサルティング実績で内外から高い評価を受けている。

(株)品質保証総合研究所：JQA との緊密な連携の下に、(1)国際マネジメントシステム企画等に関する調査、研究を行ない、(2)内外の一流講師陣による ISO9000、ISO14000 等に関するセミナー、講演会などの主催を通じて、国際システム企画の普及を進める研究所である。

## 8. アンコール・ワット環境教育プロジェクト

### ① プロジェクトの背景

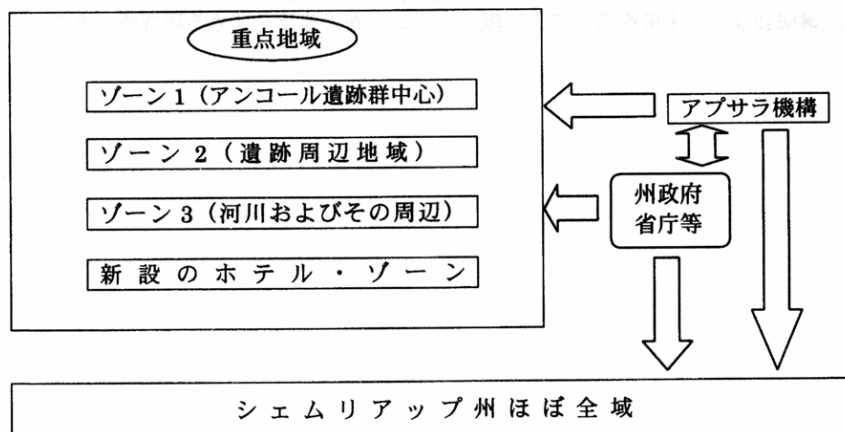
アンコール地域の環境保全の必要性



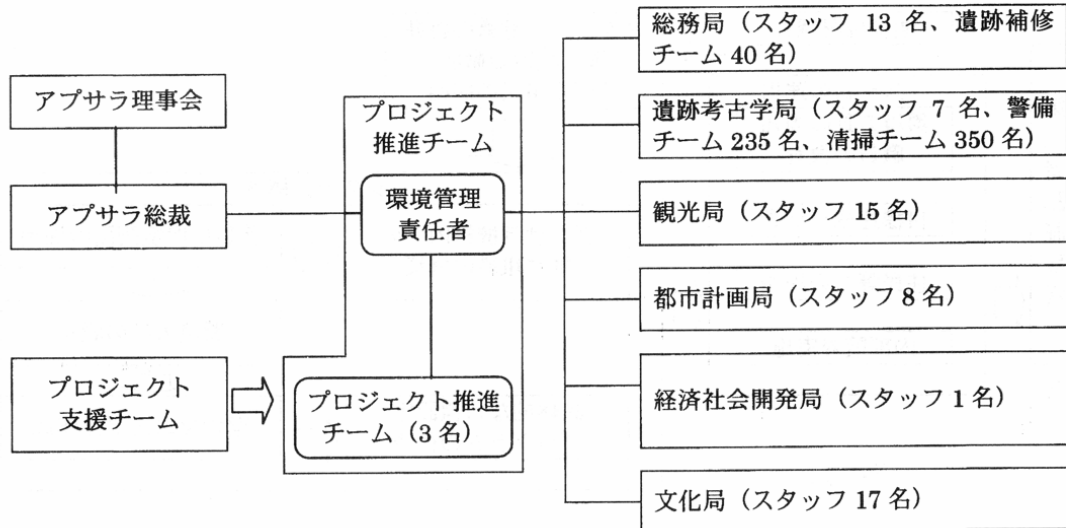
### ② プロジェクトの目標

- i) カンボジアの環境教育モデルケースを構築する
- ii) アンコール遺跡群と周辺地域の環境を保全する
- iii) 観光客の増大に即応した環境を整備する（電気自動車導入とシャトル形式の巡回自動車計画）
- iv) カンボジア人により新環境マネジメントシステムを構築し、住民の生活を改善する
- v) 調査団の人材養成プロジェクトを継承しながらアプサラ機構が ISO14001 環境マネジメントシステムを導入し、その運用組織を整備し、環境人材を養成する
- vi) アプサラ機構が ISO14001 認証を取得する（3年以内）

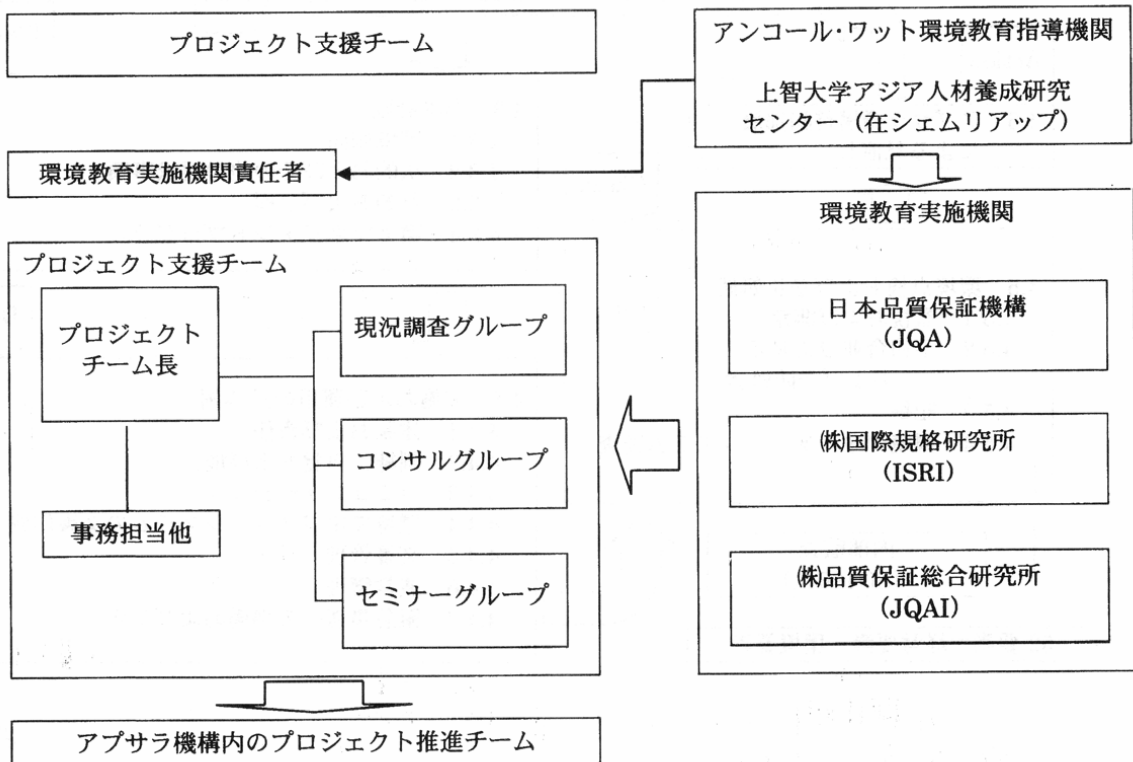
### ③ プロジェクトの対象サイト



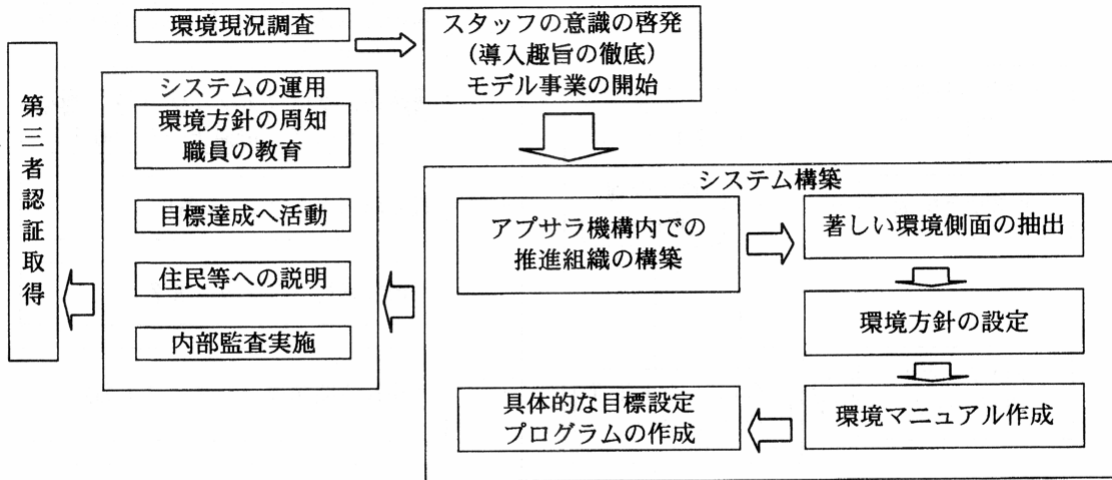
④ アプサラ機構の環境教育推進体制



⑤ プロジェクト支援体制



⑥ プロジェクトの実施プロセス



⑦ 環境教育およびISO14001 取得に向けての活動

